

働く若者 自信取り戻す

競争・上下関係なし ワーカーズコープ

働く人が出資し、経営するワーカーズコープ。中高年の失業対策として始まった活動に、若者の参加が相次いでいる。競争社会のなかで自信を失い、居場所をなくした男女が、上下関係のない職場環境のなかで自分を取り戻している。

成田空港にほど近いワーカーズコープの製油所「あぐりらん」(千葉県芝山町)。空

港や飲食店の廃食油を回収し、バイオディーゼル燃料(BDF)をつくる。創業3年。1日の生産量は200リットルと少ないが、ここで働く3人は、リサイクル社会の実現に貢献するという

誇りを抱く。その一人、魚住亮輔さん(31)は高校を卒業し、メーカーに就職。自分に自信が

なく、周りが優秀に見える。社内競争に敗れ、このまま無用な社員になるだけだと感じた。自暴自棄にな

って3カ月で退社し、4年間、部屋に引きこもった。「生きれば生きるほどこの世は残酷になる」。そう思い、自殺も考えた。

石井大介さん(31)は高校卒業を控えた時期に両親を病で亡くした。そのショック

で、バイト先で発注ミスをして大目玉をくらったことで自信を喪失。卒業しても親戚宅で4年間、引きこもった。

2005年、千葉県内で二つと引きこもりを対象にした「若者自立塾」をワ

ワーカーズコープの目標

- ◆「人間らしい労働」を最高の価値とする
- ◆すべての人が、共に生きる福祉社会をつくる
- ◆出資しあい、一人一票で経営に参加する
- ◆地域がかかえる課題の解決に役立つ事業、活動をする
- ◆自立し、愛に満ちた人間に成長する
- ◆「資本のグローバル化」による大量失業と人間の排除に対して、「民衆のグローバルな連帯」をすすめる



魚住亮輔さん(左)と石井大介さん。手にもつBDFは廃食油並みの性能を誇る。千葉県芝山町

お年寄りと一緒に歌う小野由弥香さん(右)と東京都江東区、井手町の撮影

ワーカーズコープ 働く一人ひとりが出資し、経営に責任を負う事業所。メンバー同士が助け合いながら仕事をこなし、地域振興を図るのが目的。

労働者協同組合ともいう。各事業所の運営方針を決めるのはメンバーの全員一致が原則。意見が対立する場合は協議を重ねたり、多数決で決めることもある。

1970年代に活動を始めた当初は、中高年の失業者たちが、道路の舗装や河川敷の清掃などをした。その後は児童館や高齢者福祉センターの運営、若者の就労支援、生活保護者支

援などに事業を広げている。日本にはこうした事業所を規定する法律がなく、形態はNPO法人など様々。イタリアや欧州では100年以上前から活動している。

やりがい 笑顔

東京都江東区豊洲のワーカーズコープ「豊北地域福祉事業所」は6年前に活動を始めた。区から委託された放課後の学童保育を運営する。スタッフ18人のうち10人が20代だ。

小野由弥香さん(27)は昨春まで音楽の先生だった。音大を卒業し、あこがれの職業に就いたが、職場の人間関係に疲れ、笑顔を忘れた。中野浩一さん(28)は就活で唯一受かった会社のコールセンターで働いていた。給料はありがたかった

が単純な仕事にやりがいや成長を感じられず、30歳になれば後悔すると思った。メンバーは以前の職場で上司や先輩に自由に意見を言えなかった。ワーカーズは自由に意見が出せる。全員が5万円を出資し、立場は平等。フルタイムや定年もない。新卒で入った3年の由喜奈さん(25)は「1大卒時代の友達から『おまえのこのころは甘い、緩い』と言われる。でも、働くのが楽しい。だから、私はこれでいい」と笑顔で話した。

「成長した彼らに報いたい」と原田さん。経済産業省の助成を受けた「ブランド拡張」が始まった。夏には廃食油の処理能力が6倍になり、月収を上げられる。2人の視野に恋愛や結婚も入ってくる。石井さんは「後輩が入ったら指導できるようにになります」と笑う。魚住さんも「未来を信じてみようかな」と話した。

参加5年で15倍

全国で500人所属 芝山や豊洲のワーカーズで働く若者が所属する「日本労働連センター事業団」(東京・池袋)は、全国約300カ所の事業所を統括している。

事業団によると、昨年3月末現在で約5800人が働き、5年間で1.5倍に増えた。ワーカーズは主に中高年の働く場だった。だが藤田徹理事長は「ここ4、5年、新たに入る人の半分は20、30代だ」と話す。聖学院大の大高研道教授(社会的企業論)は「ブラック企業問題の深刻化や雇用の非正規化で、働くことと自分らしく生きることが分断され、希望を持っていない若者が増えている。ワーカーズのような働き方を選ぶ若者は、今後増えていくだろう」。(編集委員・中島隆)